様　式　Ｃ－１９、Ｆ－１９、Ｚ－１９　（共通）

科学研究費助成事業　　研究成果報告書

平成 ２７ 年　 ６ 月　 ４ 日現在

機関番号：１０１０４
研究種目：基盤研究(C)
研究期間：2012～2014
課題番号：２４５２０３３４

研究課題名（和文）２０世紀ドイツ国家・国民意識との関連における国民祝典劇・記念碑の最終形態を探る

研究課題名（英文）On the last form of national celebration drama and national monument in the connection with the German nation and national awareness in the 20th century

研究代表者
鈴木　将史（SUZUKI, MASAFUMI）

小樽商科大学・学内共同利用施設等・理事・副学長

研究者番号：２０２１６４４３

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費）　　2,400,000円

研究成果の概要（和文）：本研究の前半は、19世紀末転換期の作家ヴェルニンクによる近代祝典劇への過渡的作品の実態解明に取り組み、後半では、祝典劇の最終形態と目されるハウプトマン祝典劇『ドイツ韻律による祝典劇』の研究に着手し、その詳細な成立背景を検証した。その結果、近代では社会状況の複雑化により、また作家の個性の顕在化により祝典劇の成立が困難となり、その結果『ドイツ韻律による祝典劇』という祝典劇そのものの終焉を予兆する作品が登場するに至った実態を解明した。記念碑研究に関しては、「キュフホイザー記念碑」や「諸国民戦争記念碑」の分析・検証を経て、２０世紀における典型的な「塊」的構造を持つドイツ国民記念碑スタイルを解明した。

研究成果の概要（英文）：I elucidated the actual situation of the transient celebration drama in modern times by Paul Werning at the end of 19th century in the first half of my study and analyzed Gerhart Hauptmanns celebration drama "Festspiel in deutschen Reimen" (1913) which was the last form of the modern national celebration drama. Then I inspected the detailed background of its completion. I concluded as a result, the continuation of the celebration drama became difficult by emphasis of the individuality of the writer and by complexity of the social situation in the modern times and I elucidated also the actual situation that the work " Festspiel in deutschen Reimen " which made omen the end of the celebration drama itself would appear.
About the study of the national monument, I analyzed "Kyffhaeuser-monument" and "Voelkerschlacht-monument ", and elucidated German national monument-style with the typical "mass" structure in the 20th century.

研究分野：ドイツ近現代文学

キーワード：ドイツ国民祝典劇　ドイツ国民記念碑　ドイツ近代文学　ドイツ愛国精神　ゲルハルト・ハウプトマン

１．研究開始当初の背景

本研究代表者は、19 世紀末から 20 世紀前半にかけて活躍したドイツの「国民的作家」であるゲルハルト・ハウプトマンの初期及び中期作品を主な研究対象としてきた。彼は自然主義から新ロマン主義、更には新古典主義へと様々な文学的変遷を遂げた珍しい戯曲作家だが、彼が完全に自然主義から脱却し、前年にはノーベル文学賞も受賞し押しも押されもせぬ「国民作家」として不動の地位を築いていた 1913 年、ナポレオン解放戦争勝利 100 周年を記念する祝典劇制作をブレスラウ市がハウプトマンに依頼した。彼はこれを受け、ブレスラウ解放戦争記念博覧会用祝典劇『ドイツ韻律による祝典劇』を創作するが、同年の同地での連続公演は宮廷側、戦争協会側の反発を買い、公演中途打ち切りという屈辱的な失敗に終わる。このドイツ文学史上に名を残すスキャンダルは、表層的には、ハウプトマンが「祝典劇」という演劇ジャンルを十分理解しておらず、従来の概念からはかけ離れた態度（すなわち愛国精神の欠如）で創作したためという分析が一般的であるが、申請者は「祝典劇」というジャンル的制約に縛られながらも『ドイツ韻律による祝典劇』に表われた創作理念こそ、ハウプトマン文学の本質を窺わせるものではないかと考え、従来の祝典劇という文学概念がハウプトマンにあってはどのようにデフォルメされていくのかについての研究を構想した。だがこの研究を遂行するにあたっては、ドイツ文学史における「祝典劇」そのものの成立過程とその発展過程、そしてその精神的背景を究明しなければならない。従って、ハウプトマン作品に行き着くまでのドイツ祝典劇の発展史とドイツ国民意識の変遷について系統的な検証を行ってきたことが本研究の背景となっている。そして、検証の準備課程において、「物質的モニュメント」である記念碑にも、その成立背景に関して「精神的モニュメント」である祝典劇と密接な関連が存在することが予見されたため、ドイツ記念碑研究も同時並行的に行うこととした。

２．研究の目的

本研究は、前回研究の成果を踏まえ、ハウプトマン『ドイツ韻律による祝典劇』に至るまでのドイツ国民祝典劇の変遷の系譜を完成することを第一の目的とした。この点に関しては、19 世紀末に、祝典劇のパロディがベルリンやミュンヘンのキャバレー文化の中で生み出されたところまで検証が進んでいるが、その後に祝典劇が辿る道 ― 決まり文句を並べただけの完全に陳腐化した祝典劇、又は通常の演劇的要素を大幅に取り入れ、祝典劇的特徴を薄めた演劇、或いは現時点ではまだ判明していない第三の祝典劇の形態 ― についての検証・考察はまだ完了していない。従って、この点の検証・考察を完成することが早急に求められる。また、ハウプトマン祝典劇と前後する形で、ドイツ青年運動を推進する若者層の間に祝典劇熱が起こり、更にはナチスが台頭した後に、古代ゲルマン風野外祝典劇である「ティンク劇」が創始される。これらの祝典劇は明らかにハウプトマン以前の祝典劇とは形式と内容を異にしており、ハウプトマン作品の分析と共に、ハウプトマン以降の祝典劇を分析することによって、20 世紀前半ドイツに生じた国家・国民意識の大規模な変化を浮き彫りにすることが可能となろう。一方、記念碑研究についてであるが、祝典劇とほぼ同じ意味合いで劇よりもやや遅く着手された記念碑建築ブームは、1883 年建設の「ニーダーヴァルト記念碑」まで考察が進んでいる。宮廷礼賛から国家・国民礼賛への切り替えも記念碑は祝典劇より遅く、純然たる国民記念碑の登場は、1897 年建設の「キュフホイザー記念碑」まで待たねばならない。更にこの記念碑の発展形としてライプティヒに建設された「諸国民戦争記念碑」を分析・検証することにより、ドイツ近代国民記念碑が有し、国民祝典劇にも通じる 20 世紀前半のモニュメント精神を抽出することを第二の目的とする。

３．研究の方法

本研究における祝典劇研究分野は、文献の検証・分析を中心として進められる研究であるため、祝典劇原典を中心とするできるだけ広範囲の文献を収集することが前提となった。ハウプトマン祝典劇に至る 20 世紀初頭までの重要な祝典劇群は、既に相当数を収集済みである。ハウプトマン関連文献については、本研究代表者はハウプトマン研究が元々の専門分野であるため、「生誕 100 周年記念全集」を始めとする文献は豊富に収集していた。ただ、O. ブラーム及びM. ラインハルト関連文献は、ドイツ・オーストリア本国を含め、新たに収集する必要があった。ドイツ国民記念碑関連についても、我が国には全く文献が存在しないに等しいので、ドイツ本国にマイクロフィルムも含めた文献複写申請を行う必要があった。

４．研究成果

平成 24 年度：

本年度前半は、祝典劇を娯楽劇として成功させた 19 世紀末転換期の作家ヴェルニンクの祝典劇の実態解明に取り組んだ。ヴェルニンクは、そのファーストネーム「パウル」さえも定かではない「謎の興行師」でもあり、彼の祝典劇も原典は殆ど現存していない。ただ、その反響は頗る良好であったらしく、雑誌“Kunstwart“等でヴェルニンク祝典劇のドイツ各地での上演に関する報告が再三に渡りなされている。ただ、劇の内容はかなり様式化されたものであったらしく、雑誌

“Kunstwart“は同時に痛烈な批判をヴェルニンク祝典劇に加えた。ただ“Kunstwart“も世紀転換期ドイツに流行したドイツ本来の文化の保持を謳う「郷土芸術」を標榜しており、こうした批判は単なる文学的問題に留まるものではない。そして本年度の研究により、“Kunstwart“のヴェルニンク祝典劇批判は、実は「ヴェルニンク祝典劇を利用した“Kunstwart“自体のマッチポンプ的な広報活動」の形跡が色濃いことが明らかになったのである。また、解放戦争100周年を迎えるこの当時には戦争当時の高揚感も収まるに従い、ケーニッヒの『シュタイン』や、ハイヤーの『貫徹！』(“Durch!“）など、愛国精神を殊更強調はしない一般戯曲に近い祝典劇も生まれてくるが、これらの作品の延長線上にハウプトマン祝典劇も存在していることが確認された。そして、本年度後半には、いよいよハウプトマン祝典劇『ドイツ韻律による祝典劇』(1913)の研究に着手し、その詳細な成立前史を検証した。記念碑研究に関しては、「キュフホイザー記念碑」や「諸国民戦争記念碑」など、国民記念碑の最終形態ともいえる巨大記念碑の調査・考察を進めた。

平成25年度：

本研究を遂行するにあたって、国民祝典劇の最終形態の集大成と目されるG．ハウプトマン『ドイツ韻律による祝典劇』(1913)を綿密に検証・考察することが、とりわけ重要となる。（この作品以降、世間の注目を集める祝典劇はドイツには登場しない。）前年度から既に本作品の成立前史研究は、それまでの祝典劇史研究を踏まえ着手されていたが、本年度からは本格的にこの国民祝典劇におけるターミナル・ワークとなる本作の分析・検証に取り掛かった。本年度前半では、本作の直接的な成立背景として、20世紀初頭における劇作家ハウプトマンと、彼を見出し、自然主義ブームをドイツ演劇界にもたらした劇場監督O．ブラーム、それに同じくブラームが役者として見出し、後に彼を追い落とすまでの地位へと上り詰め、大規模演出を得意とした演出家M．ラインハルトとの複雑な関係を様々な書簡・証言から検証し、ブラームの存在により叶わなかった当代の人気劇作家ハウプトマンと人気演出家ラインハルトの共同作業が、『ドイツ韻律による祝典劇』でようやく実現した状況を綿密に分析した。そして本年度後半には、晴れてラインハルトと組むことが可能となったハウプトマンが「祝典劇」の執筆にためらうこととなる、その背景の詳細な分析へと移行した。ハウプトマンは従来から優柔不断な性格で知られており、手を付けたものの完成できなかった未完作も相当数に上るが、この祝典劇執筆への躊躇には、作家本人のそうした性格以外にも、「祝典劇」という文学ジャンルを執筆することへの彼自信の違和感（彼は政府の政策や社会状況を痛烈に批判する自然主義作品により作家としての地歩を固めた)、並びにラインハルトが編み出し、後に一世を風靡する「大規模演出」への不安が認められる。本研究ではそうした作家の態度を分析することにより、最終段階で付け加えられた祝典劇の新たなる形態の特徴（ゲーテを多分に意識した人間性・平和性を称賛する汎用的祝典劇）を考察した。

平成26年度：

本年度では、既に前年度より着手していたハウプトマン『ドイツ韻律による祝典劇』の分析を更に継続・発展し、この祝典劇が上演中止スキャンダルにまで至る受容史の分析・検証を通じて、文学ジャンルとしての「祝典劇」が、近代ではその存続そのものが困難となる実態を解明した。その象徴的作品が前述のハウプトマン祝典劇であるが、そこにはこの祝典劇が従来の祝典劇とは相容れない要素として5点認められる。即ち1．プロイセン宮廷の軽視、2．ナポレオン礼賛とも解釈されかねない内容、3．ドイツ解放戦争の英雄たちの軽視、4．希薄な解放戦争勝利意識、5．作品全体に見られる愛国精神の欠如、の5点である。これらの要素は、ハウプトマン作品に特有なものであるというより、20世紀前半の国民意識を代弁したものであり、もはや19世紀に量産された典型的ドイツ帝国礼賛型国民祝典劇は過去の遺物となったことの証と考えるべきであろう。それと呼応するように、近代国民記念碑の分野においても、「キュフホイザー記念碑」を経て、「諸国民戦争記念碑」を建設するにあたり、国民記念碑はもはや宮廷や戦勝を顕彰するモニュメントではなくなり、ドイツ精神を象徴した塊（かたまり）を強調する「マッセ」的構造により、鎮魂的・平和的使命を強調した建設コンセプトを有するに至るのである。国民記念碑は国民そのものを礼賛する「聖物」であり、その敷地は聖地として、汎用的意味を付与される。この点において、ハウプトマンの『ドイツ韻律による祝典劇』は、「諸国民戦争記念碑」に通じるドイツ精神を顕彰した正に近代的な精神モニュメントと呼びうるが、戦勝を記念する祝典劇としては失敗作であり、その上演中止スキャンダルは、祝典劇が現代には存続し得ない事情を端的に表した事象と捉えられよう。本研究の発展研究としたドイツ青年運動へと繋がる「ティンク劇」研究については、時間的制約により今回の研究では分析・考察することが叶わなかったが、以降の継続的研究課題として取り組んでゆきたい。

５．主な発表論文等

（研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線）

〔雑誌論文〕（計　6件）

<u>鈴木将史</u>　「G．ハウプトマン『ドイツ韻律による祝典劇』作品受容史（その１）」、「小樽商科大学人文研究」、査読無、第129輯、

2015、43-63 頁

鈴木将史　「ドイツ近代国民記念碑について（その３）－『キュフホイザー・ヴィルヘルム皇帝記念碑』から『諸国民戦争記念碑』まで－」、「小樽商科大学人文研究」、査読無、第 128 輯、2014、21-32 頁

鈴木将史　「祝典劇執筆依頼の経緯とＧ．ハウプトマンの対応－『ドイツ韻律による祝典劇』成立史(1) －」、「小樽商科大学人文研究」、査読無、第 127 輯、2014、75-90 頁

鈴木将史　「『ドイツ韻律による祝典劇』成立前史(2)」、「小樽商科大学人文研究」、査読無、第 126 輯、2013、201-224 頁

鈴木将史　「『ドイツ韻律による祝典劇』成立前史(1)」、「小樽商科大学人文研究」、査読無、第 125 輯、2013、57-70 頁

鈴木将史　「ドイツ国民祝典劇最後期に見られる祝典劇の陳腐化と一般化」、「小樽商科大学人文研究」、査読無、第 124 輯、2012、71 - 84 頁

〔学会発表〕（計　1 件）
鈴木将史　「G.ハウプトマンを巡るブラームとラインハルトの相克」、日本独文学会 2013 年度春季研究発表会、2013 5 月 26 日、東京外国語大学（府中市）

６．研究組織
(1)研究代表者
鈴木 将史（SUZUKI MASAFUMI）
小樽商科大学　言語センター　理事・副学長
　研究者番号：20216443